

〈調査報告・資料〉

# 中国の SNS 上における 言語表現の簡略化現象

趙 昕

## 要 旨

三十年来、中国社会が大きな変貌を遂げてきた。これは、言語表現の世界においても同様である。とくに SNS 上においては、ネット発信に速度が要求されるため、文字数を少なくして文章を短くし、キーボード操作をできるだけ簡単にすることから、軽い気持ちで文字や用語を操るようになり、その結果、言語表現の簡略化現象が生じたのである。

ただ、この簡略化現象は、すべてにおいてまんべんなくかつ恣意的に行われているわけではなく、その多くは、ある一定の文型、文法のうえに成り立つ言葉に対して、それを簡略化処理するのである。なかでも、もっとも多く見られるのが、「介詞＋名詞＋動詞」を基本構造とする文型に対するものであり、かつ、「介詞文」と「使役文」、「把」構文の三種の文に集中している。それにおける共通の特徴は、介詞を不要にして字数と文成分を減らし、介詞の後に置かれるべき介詞賓語を動詞、とくに自動詞と離合動詞の後に移動してその目的語とし、自動詞や離合動詞を他動詞に変容させる現象である。

本稿は、上述簡略化処理の現象を紹介、分析するものであるが、最後に、簡略化処理後の文が、中国語を母語とする人には理解するのにまったく支障が生じないだろうが、中国語を外国語として学習する人にとっては、注意を喚起する必要があることを提起している。

キーワード：1 「介詞＋名詞＋動詞」を基本構造とする文

1 介詞文    1 使役文    1 “把”構文

## 一 はじめに

約三十年来、中国は、国内では経済が飛躍的に発展し、国際的には、国際交流と国際協力がさまざまな分野において広がり、深まっている。その過程において、中国の社会事情や人々の生活スタイルと考え方も急激に変わり、それにしたいが、言語表現においても、多くの変化が見られるようになってきている。新しい言葉が生まれたり、既存の言葉に新しい意味や使い方を付与したりするのはもちろんのことであるが、生活のリズムが加速化し、情報量が劇的に増え、かつ多様化していることなどにより、言語表現の様式が単純に、あるいは簡略化になる傾向も目立つ。

この傾向は、SNS上<sup>(1)</sup>においてとくに顕著である。上記いくつかの理由に加え、ネット発信は、多くの場合速度が要求されるため、文字数を少なくして文章を短くし、キーボード操作をできるだけ簡単にする必要がある。それにしたいが、軽い気持ちで文字や用語を操るようになり、その結果、言語表現の簡略化現象が生じる可能性があった。

ただ、この簡略化現象は、すべてにおいてまんべんなくかつ恣意的に行われているわけではなく、その多くは、ある一定の文型、文法のうえに成り立つ言葉に対して、それを簡略化処理することを、本稿で明らかにしたい次第である。

「一定の文型、文法のうえに成り立つ言葉」に対する簡略化処理は、SNS上においてはいろいろあるが、なかでも、もっとも多く、もっとも頻繁に行われるのが、「介詞＋名詞＋動詞」を基本構造とする文型に対するものであり、かつ、「介詞文」と「使役文」、「把」構文」に集中しているように見える。以下、この三種の文に対する簡略化の実例を見る<sup>(2)</sup>。

## 二 介詞文の簡略化

介詞文の簡略化は、ひとことで言うと、その介詞を不要にして用語量を減らし、文法構造や文型をより単純にする現象である。

現代中国語では、介詞文は、文法的機能の面からいくつかの用法がある。中には、介詞フレーズを動詞フレーズや形容詞フレーズの前に用いるタイプと、介詞フレーズを動詞の後に用いるタイプが主要な用法である。文成分を介詞、介詞賓語（以下「中心詞」とする）、動詞または形容詞、動詞の賓語（以下「目的語」とする）のみに限定すると、下のような基本形式が見られる。

なお、本稿に取り上げるすべての例文について、介詞には二重下線、中心詞には一重下線、動詞または形容詞には太い波線、目的語また他の文成分には細い波線をつける。

- A 1 请一定跟我联系。 (必ず私に連絡してください。)
- 2 我军应该从敌军的左侧上岸。 (わが軍は敵軍の左側から上陸すべきだ。)
- 3 我想给孩子买电脑。 (子供にパソコンを買ってあげたい。)
- B 4 小楼坐落在一片幽静的小树林里。 (小型マンションは静かな林の中に立っている。)
- 5 请把这本书交给小张。 (この本を張君に手渡してください。)
- 6 孩子的优秀基因来自于爸爸还是妈妈？ (子供の優れた遺伝子が父親と母親のどちらからくるのだろうか。)

- C 7 乡亲们对我们热情极了。(村民たちは私たちにとても親切だ。)
- 8 明天总会比今天美好。(明日はきっと今よりは素晴らしいでしょう。)

上のAの1から3は、介詞フレーズが動詞の前に用いられる例である。ただ、構造上は、三つの例はそれぞれ異なる。例1は「介詞+中心詞+動詞」、例2は「介詞+中心詞+離合動詞<sup>(3)</sup>」、例3は「介詞+中心詞+動詞+目的語」の文型である。

Bの4から6は、「動詞+介詞+中心詞」という、介詞フレーズが動詞の後に使われる例である。また、Cの7と8は、介詞フレーズを形容詞フレーズの前に用いたものであり、うち例8は比較文である。

今回考察した介詞文に関しては、主にその介詞を不要にする簡略化表現であるが、その簡略化表現は、上のA文型に関してもっとも多く見られる(言語運用面でも、同じ動詞文であっても、B文型はそもそもA文型よりも種類が少なく運用頻度が低い)。また、C文型に関しては今回、あまり簡略化表現は見られなかった)。これも理由の一つであって、本稿では、主にA文型に対する簡略化表現の実例を見る。

以下に取り上げる例は、左は、筆者が集めた実例で、右の( )内は、それら実例を、筆者が介詞を用いた従来の文型に還元したものである<sup>(4)</sup>。

- 9 不知为什么，他最近不太联系我。(跟我联系)
- 10 好好！我们马上登录你们网站。(在你们网站登录)
- 11 不管大事小事，都要随时报告总管。(向总管报告)

上の9から11の“联系”，“登录”，“报告”は、いずれも他動詞(中国

語文法では“及物動詞”と称するが、以下、「他動詞」とする）である。しかし他動詞とはいえ、“吃饭（ご飯を食べる。）”、“写字（字を書く。）”の他動詞“吃”、“写”とは違って、つねに動作や行為を行う際の交渉相手や宛先の存在を必要とする。つまり、たとえば、例 9 は、“跟我联系各种业务”，例 10 は、“在你们网站登录我们的地址姓名”，例 11 は、“向总管报告工作的进展情况”という、「介詞＋（交渉相手や宛先を示す）中心詞＋動詞＋目的語」のような文型が、これら三つの他動詞の本来の使い方である。この 3 例では、それぞれ本来あり得た目的語（中国語文法では「直接目的語」という）の“各种业务”，“我们的地址姓名”，“工作的进展情况”を省略することが可能であるが、省略しても、各例の（ ）の中のような形になるはずである。しかし、左の実例では、介詞を取り除いて三つある文成分を二つに減らし、それぞれの中心詞、つまり、交渉相手や宛先を表す語を動詞の後に移動してその直接目的語に変容させている。

- 12 准备明天出发北京。（从北京出发）
- 13 你们警察是服务人民的，不是欺压人民的！（为人民服务）
- 14 只身一人搏斗三个歹徒达一小时之久。（与三个歹徒搏斗）
- 15 必须在明早 6 点前登陆敌前沿阵地的海岸！  
（在敌前沿阵地的海岸登陆）
- 16 歹徒们竟当众施暴她。（对她施暴。）
- 17 新加坡人在美国电视上用华语喊话中国人。（向中国人喊话）

12 から 14 の動詞“出发”，“服务”，“搏斗”は自動詞（中国語文法では“不及物動詞”と称されるが，以下，「自動詞」とする）である。自動詞であるため，一般に後に目的語が取れない。

15 から 17 の動詞“登陆”，“施暴”，“喊话”は離合動詞である。注③で述べたように，離合動詞は，品詞または意味上において動詞ではあるが，「動詞＋名詞」の構造である。つまり，上記 15, 16, 17 の動詞は構造上，各 2 字目の“陆”，“暴”，“话”が，それぞれ 1 字目の“登”，“施”，“喊”の目的語であるという，自動詞的な性格をもっている。このため，そのさらに後にもう一つの名詞または名詞性語を取ることができない。これは，上掲“吃饭”，“写字”の後に，さらに何かの名詞または目的語をつけることができないのと同じである。

このように考えると，上の 12 から 17 は，本来なら各還元文のように，介詞文で表現しなければならないが，この文法的約束を破り，介詞を抜きにし，中心詞を自動詞または離合動詞の後に置いてその直接目的語とした。つまり，文成分の数を減らして文構造を簡単にしただけでなく，自動詞と離合動詞を他動詞のように用いたのである。

### 三 使役文の簡略化

現代中国語の使役文は，次の形になっている。

18 老师让我们去留学。(先生は私たちに留学に行くようと言った。)

19 那件事使她很伤心。(彼女はそのことでとても悲しかった。)

使役文は，文型や文成分また文成分の数量において介詞文と同様である。上記 2 例の中の“让”，“使”は，「使役」という文法的な働きをもつ

ことに特徴があるが、品詞分類ではやはり介詞である。したがって、この 2 例中の、働きかけられる対象である“我们”と“她”は、介詞文の中心詞に相当し、“去留学”と“很伤心”は、介詞文の中の動詞または形容詞フレーズに相当する。

- 20 这样子就会破灭那些农民进城买房的想法。  
 (使那些农民进城买房的想法破灭)
- 21 遇到这样的事情，必须曝光它！（让它曝光）
- 22 军方正积极研究“升级”本国武器。（使本国武器升级）
- 23 戈尔巴乔夫：我解体苏联。（使苏联解体）
- 24 示威者要求立刻停止激化乌克兰局势的行为。（使乌克兰局势激化）

以上各例のように、使役文の標識で、それがなければ使役文にはならないという、もっとも重要な語——“让”，“使”がなくなっている。その代わりに、本来“让”，“使”の後にあるべき賓語“那些农民进城买房的想法”，“它”，“本国武器”などが、それぞれ動詞の後に移されてそれら動詞の直接目的語となっている。こうなると、たとえば 20 の“破灭”，21 の“曝光”，22 の“升级”は、もはや一般の動詞にはとどまらず、「破滅させる」，「暴露させる」，「レベル上昇させる」という、具体的な意味や意義をもった使役動詞になっているのである。

中国語の使役文は動詞文か形容詞文である（前掲例 18 は動詞文，例 19 は形容詞文）。動詞文の場合，他動詞，自動詞，離合動詞のいずれも使われるが，今回考察した事例では，上の 20 から 24 例のように，自動詞や離

合動詞を使った例がほとんどで、他動詞の例はあまり見当たらない。その理由について改めて考えたい。

#### 四 “把” 構文の簡略化

“把” 構文の“把”も、品詞上介詞に分類されるが、文構造は介詞文や使役文と異なるところがある。介詞文と使役文は、「介詞＋中心詞＋動詞」のみでも成立するが、“把” 構文は、動詞の後にさらに何らかの文成分がなければ成立しない。この文型について一説には、「あるものをどのように処置、処理する」、あるいは、「あるものに何かの結果や状態をもたらす」というところに特徴があるという。この説の一理のあるところは、「処理、処置、結果、状態」などを表すには、少なくとも現代中国語において動詞のみでは表現できず、あるいは表現しきれず、そのため、動詞の後にさらにほかの成分、つまり、「処理、処置、結果、状態」などを表す成分が必要というわけである。

25 来！咱俩把这瓶酒喝光！（さあ、この一本の酒を全部飲み干そう。）

26 我把这些花放在客厅的饭桌上，行吗？

（これらの花をリビングの食卓に置いていい？）

例 25 の最後の字“光”は、“喝”という動詞の後に来るいわゆる結果補語である。この場合、“来！咱俩喝光这瓶酒！”と言っても、文法的には問題はない。ただ、上述のように、“把” 構文は、あるものについてどのように処置、処理するということに重点があるため、「この一本の酒を飲み切るようにしよう」という点からは、“把” 構文で表現するのが望ましい。

第 26 例は，“把”構文で表現しなければならない。“放在客厅的饭桌上”は、介詞フレーズを動詞の後に用いる文型である<sup>(5)</sup>。また，“这些花”は，“放”という動詞の目的語である。現代中国語文法では、「動詞＋目的語＋介詞フレーズ」，あるいは「動詞＋介詞フレーズ＋目的語」の構造が許されない。このため，目的語を動詞の前に移動し，さらにその前にあらたに介詞“把”を置くようになっていく。つまり，「把＋中心詞＋動詞＋他の文成分」という文型である。

27 那我打包这几个菜怎么了？（把这几个菜打包）

28 泽连斯基打算解职国家安全局长伊万。（把国家安全局长伊万解职）

29 塔利班敦促美国尽快解冻阿富汗的资产。（把阿富汗的资产解冻）

上記 27 から 29 の“打包”，“解职”，“解冻”は，離合動詞である。「二」で述べたように，離合動詞は，「動詞＋名詞（目的語）」の構造であり，その後さらに目的語を置くことができない。このため，上記三つの例の場合，それぞれの目的語“这几个菜”，“国家安全局长伊万”，“阿富汗的资产”は，本来なら動詞の前に持っていく，「把＋中心詞＋動詞＋他の文成分（“包”，“职”，“冻”がそれにあたる）」のように，“把”構文で表現しなければならない。しかしこの三つの例では，“把”を使わないことにより，本来四つある文成分を三つに減らし，かつ，自動詞の性格が強い離合動詞を一般他動詞に変質させて目的語を伴わせている。

30 先切豆腐成小方块。（把豆腐切成小方块）

31 专家说别放鸡蛋到冰箱里。（把鸡蛋放到冰箱里）

30 と 31 は、例 26 と同じように、介詞フレーズが用いられる文であるが、本来なら、“成小方块”，“到冰箱里”という介詞フレーズと目的語の“豆腐”，“鸡蛋”を同時に動詞の後に並べることができないため，“豆腐”と“鸡蛋”を動詞の前に置き、介詞“把”の文法的な働きを借りた形で表さなければならない。しかしこの2例は、こういう文法の規則を無視している。

## 五 結語

以上、「介詞＋中心詞＋動詞」の文型を中心に、SNS 上における言語表現の簡略化現象を見た。しかしながら、なぜこの簡略化現象が「介詞＋中心詞＋動詞」の文型に集中して見られるのかを考えると、それは、古典中国語に関係しているのではないかと思われる。というのも、古典中国語では、このような「簡略化」表現はむしろ普通であった。

古典中国語	<u>勤劳</u> 天下， <u>憂苦</u> 萬民。（『漢書・文帝紀』卷 4）
現代中国語	<u>为</u> 天下 <u>勤劳</u> ， <u>为</u> 万民 <u>忧苦</u> 。
本稿二の13	你们警察是 <u>服务</u> 人民的，不是 <u>欺压</u> 人民的！（ <u>为人民服务</u> ）
古典中国語	晋侯 <u>飲</u> 趙盾酒。（『左伝・宣公二年』卷 21）
現代中国語	晋侯 <u>让</u> 赵盾 <u>喝酒</u> 。
本稿三の21	遇到这样的事情，必须 <u>曝光</u> 它！（ <u>让它曝光</u> ）
古典中国語	<u>無有</u> 而 <u>有</u> 無。（『荀子・解蔽第 21』） <sup>(6)</sup>
現代中国語	<u>把</u> 有 <u>当作</u> 无， <u>把</u> 无 <u>当作</u> 有。
本稿四の27	那我 <u>打包</u> 这几个菜怎么了？（ <u>把这几个菜打包</u> ）

そもそも、中国語の介詞と介詞構造は、後世になって徐々に発達したもので、早期にはそれはあまりなかった。このため、現在の SNS 上における、介詞を抜きにし、残りの文成分の文法的相互関係を変化させて文構造を簡略にする現象は、古典中国語に由来する側面もあるのではないかと思われる。

もう一つ考えたいのは、今回集めたすべての介詞抜きの実例は、おそらく中国語を母語とする人なら、理解するにはまったく支障が生じないだろうということである。これも、このような簡略化現象が生じ得た理由の一つかもしれない。しかしことを逆に考えれば、現代中国語を外国語として学ぶ人には、この現象のあることを紹介し、注意を促す必要があるのではないかと思われる。

#### 《注》

- (1) 中国でよく利用されている SNS は、WeChat（ウィーチャット・微信）、Weibo（ウェイボー・微博）、TikTok（ティックトック・抖音）などがある。
- (2) 各実例は、SNS 上から採取したもので、瞬時的に目にしたり、耳にしたりし、また、そもそも出所がわからないものがほとんどなため、本稿では、取り上げた実例について、出所を一律明示しないことにする。
- (3) 「離合動詞」は、ほとんど 2 字語で、言葉の意味や文法的要求に応じて、二つの字を一緒に使用するか、離して使用するという特別な動詞である。たとえば、「睡覺（寝る）」の場合、「我每天十二点睡覺。（私は毎日 12 時に寝る。）」では、「睡覺」は一緒になってこれは“合”の使い方である。しかし「我每天睡十二个小时的覺。（私は毎日 12 時間寝る）」になると、2 字の間に“十二个小时的”という文成分を挿入させなければならない。これは“離”の使い方である。この場合、文法上“覺”は“睡”の目的語となり、その後さらに他の目的語などをつけることができない。
- (4) 各例の取り扱い方においては、できるだけ一行以内に収めるため、還元文については、介詞フレーズと動詞以外の部分をカットしている。
- (5) 動詞の後に使われる介詞フレーズについて、これを「結果補語」の部類に入れるべきとの意見と、単独で「介詞補語」に分類すべきだという意見がある。後者には、『实用現代漢語語法』（劉月華等著、商務印書館、

2001,5)がある。文法に関する議論は本稿の主旨に含まれないため、ここでは単に、「介詞フレーズ」という表現にとどめる。

- (6) 原書では“此人之所以無有而有無之時也。”となっているが、分かりやすくするため、“無有而有無”だけを抜き取って例にした。

(原稿受付 2022年11月4日)